学位論文審査結果及び最終試験報告書

学位申請者氏名	稲村　奈緒子	報告番号	甲　第 17 号
申請学位 (専攻分野)	博　士　（　学術　）	専　攻	総合生活専攻
論文題目	中高齢者を対象とした歌唱が口腔機能に及ぼす影響		
成　　績	論 文 審 査 及 び 最 終 試 験		合格

論文審査 審 査 員		氏　　名	職　名		氏　　名	職　名
	主査	柳澤　幸江	教授	審査員	古畑　公	健康科学博士
	審査員	鬘谷　要	教授			
		水口　俊介	歯学博士			
		豊川　智之	医学博士			

論文審査の要旨（１６００字程度）

審査対象論文「中高齢者を対象とした歌唱が口腔機能に及ぼす影響」は、以下の６章から構成される。以下にその概要を示した。

第１章では、序章として歌唱習慣を有することが口腔機能に及ぼす影響についての社会的意義とこれまでの先行研究について論じた。超高齢社会に突入した日本では、健康寿命の延伸が重要な課題であり、口腔機能の低下が全身の健康に与える影響が注目されている。特に、オーラルフレイル（口腔機能低下症）の予防が、フレイルや要介護状態を未然に防ぐための重要な鍵と考えられる。その中で、歌唱すること、歌唱習慣を有することの有用性を、オーラルフレイル予防の観点から明らかにする意義を示した。

第２章では、歌唱習慣を有することとオーラルフレイルスクリーニング指数との関連性の検証を行った。健康な中高年 32 名を対象とした研究を行い、歌唱習慣を有することは、有意にオーラルフレイルスクリーニング指数を低下させるとの結論を得た。

第３章では、歌唱前後の口腔機能指標の変化を、舌圧、口腔内水分量、自律神経バランス（LF/HF 比）などの指標を用いて、単回の歌唱が口腔機能に与える即時的な影響を検証した。2 章とは対象を異にした健康な中高年 31 名を対象に研究を行い、１回 20 分程度の歌唱指導後に、舌圧が有意に増加することを明らかにした。

第４章では、全国規模のウェブ調査を実施し、歌唱習慣の実態、それらとオーラルフレイルスクリーニング指数との関連性、さらにオーラルフレイルの認知レベルと情報源を検証した。対象は 20 歳代から 80 歳代の一般成人 700 名であり、各年代の男女数は 50 名とした。1 ヶ月の総歌唱時間が 120 分以上の者を歌唱習慣ありとすると、歌唱習慣あり者は 7.3%と極めて低かった。習慣の有無とオーラルフレイルスクリーニング指数との関連性は見いだされなかった。また、オーラルフレイルの認知レベルは低く、83.5%が「認知度が低い」、もしくは「認知度が大変低い」とされた。オーラルフレイルに関する情報源としては、テレビなどのメディアやインターネットが主であり、医師や歯科など医療機関からの情報提供は限定的であった。残歯数、口腔健康リテラシーとオーラルフレイルスクリーニング指数との関連では、重回帰分析の結果、年齢が高く、口腔健康リテラシー評価が低く、残存歯数が少ないほど、オーラルフレイルスクリーニング指数は有意に高かった。

第５章では総合考察を加え、第６章では、総括として以下の結論を導いた。歌唱習慣を有することは、中高齢者における口腔機能改善において一定の役割を果たし、オーラルフレイル予防に寄与することが示唆された。

様々な口腔内器官の共働・協調による歌唱は、食物摂取時の咀嚼・嚥下機能とかなりの共通点を有し、口腔機能の低下は、歌唱機能の低下にも通じるものである。本論文は、日常的な歌唱習慣を有することが、ひいてはオーラルフレイルの予防にも影響し、健康寿命の延伸に繋がるという視点を提唱し、歌唱の可能性を提案したものである。歌唱そのものは、費用も道具も不要であり、その意識付けが有効となる。

本研究は、歌唱および歌唱習慣を有することが口腔機能の維持に有用であること、オーラルフレイルの予防策になり得ることを明かにしたものであり、その学問的意義に加えて社会的にも貢献しうるものである。申請者は歌手として30年超の経験を有し、歌唱活動によってこれまでの業績を重ねてきた。本研究成果を歌唱の有用性を示すエビデンスとし、今後も歌唱を通じて健康寿命の延伸につなげた歌唱啓蒙活動を推進することが期待される。

以上の結果から、提出された本論文は博士（学術）に相応しい内容であることを、審査委員会の総意として判断した。